

共感：核戦争を起こさないために

核兵器のない世界について、そして核兵器が世界を救ったかどうかについて考え始めた私は、まず、核兵器が市井の人々にどのような影響を与えているのか、つまり、「世界」が核兵器によって救われたと信じているのかをはっきりさせたいと考えた。私はまず友人に尋ねてみることにした。「世界」がどう考えているかは、毎日何時間も核兵器について考えている私よりも、おそらく彼らのほうがよく知っているはずだからである。

私の友人たちは皆、核兵器についてかなり単純な考えを持っているようだった。核兵器についてどう思うかと尋ねると、答えはおおよそ2つのうちのどちらかだった。核兵器は「怖い」、あるいは核兵器についてはあえて考えない、の2つだ。核兵器が世界を救うことができる、あるいは救ってきたと主張する者はいなかった。

こうした会話の中で、彼らはしばしば私に同じ質問を返してきた。——君は核兵器についてどう思うのか？私は答えるのに苦労した。というのも、私自身、核兵器について何カ月も考えてきたにもかかわらず、核兵器について複雑な感情を抱いているからである。

核兵器は怖いか？もちろんだ。核戦略について考えるとき、私は未だに、この兵器が生み出す物理的な恐怖をあえて考えないようにしている。なぜなら、それを無視しなければ、何もできなくなってしまうからだ。恐怖を無視する理由は、端的に言えば、生き残るためである。あまりに長い間、当然そこに存在する恐怖に身を任せていると、前に進めなくなってしまう。

核兵器のことをあえて考えないようにしている？もちろんだ。誰にでも他の趣味が必要である。しかし、繰り返しになるが、核政策を取り扱うということは、本質的に恐怖を無視することと、恐怖に立ち向かうこととの間のバランスを取ることである。その綱渡りは、とてつもなく精神を摩耗させる。時には、固い地面に足をつけることも必要だ。

しかし、ほとんどの場合、私が核兵器について考える時は、核兵器廃絶を主張する人たちが考えないようなことを考えている。それは、安定性についてである。核兵器を保有している敵国の威圧から自分たちを守るために、核兵器が必要であることを考える。80年間にわたって世界では大国間の戦争がなかったことについて考える。

私は絶対的な核廃絶論者ではない。自分が直面している核兵器という問題に対し、私は複雑な感情を抱いている。核兵器が「世界を救った」とは思っていないが、核兵器の作り出す安定

が——たとえそれが幻想であったとしても——大国同士の戦争で何百万人もが死ぬことより悪いとは思わない。しかし重要なのは、核兵器が安定をもたらしただけではないという点、世界に肯定的な力をもたらしただけではないという点である。

核兵器のない世界とはどのようなものだろうか？平和なユートピアではないだろう。核兵器が最初に生み出した安定は失われるだろう。各国が人類滅亡の脅威という抑止力を持たなくなれば、世界大戦が起こるかもしれない。

にもかかわらずなぜ、私は核兵器のない世界を提唱しているのだろうか？核兵器が明らかに大国間の戦争から「世界を救った」と言えるのに。

私がそれを提唱する理由は、核兵器がこの世界に生んだ2つ目のもののためである。それはこの地球上のすべての人々の心にもたらす恐怖感である。私は、その恐怖からの自由を求めている。核兵器の存在する世界では、誰もが頭上に見えるものがある。それは、核の歴史の著述家であるチャック・ハンセンが「アルマゲドンの剣」と呼んだものだ。私たちは抑止力と呼ばれる恐怖の絶妙なバランスの中で生きており、それを安定性の名のもとに正当化している。かつてジェームス・マーティン不拡散研究所のジェフリー・ルイスは、「恐怖こそ、【抑止力】が機能していることの目印だ」と述べた。抑止のもたらす利点も理解できるものの、私は単純に恐怖の中で生きることを望まない。

核兵器のない世界では、アルマゲドンの剣が私たちに迫ることはない。かつてないほどの集団的な安心感が得られることになる。世界全体がある種の安心から息を吐きだし、筋肉の緊張を緩めることができる。戦争がどれほど激化したとしても、私たちが数時間で滅亡に至ることはないだろうと思えることは、世界中にとって心理的な救いであり、その恩恵は計り知れない。核兵器は大国間の戦争から世界を「救う」。私は、それが10年後、あるいは50年後かもしれないが、人々が築いてきたものや愛したもの、知っているすべての人々が消滅してしまうかもしれないと考える苦痛から世界を救いたいと考えている。それは価値ある目標であると思う。

しかし、もし私が核兵器のない世界の方が、それがあつた世界よりも良いと性急に結論付けるのであれば、今の核兵器のある世界についてあれこれ考えを巡らした、前段の文章には一体どのような意味があつたのか？

私が自分の疑念について述べた理由は、そのような疑念を抱えているのが私だけではないからだ。世界の指導者、官僚、そして何千人もの思想的リーダーが核兵器に依存している。現在の世界は危険で恐ろしい場所となっている。威圧が増大し、安全保障は低下し、冷戦以来もっとも世界的な緊張が高まっている。我々の指導者たちは、究極的には核兵器が彼らを守っていると信じている。彼らは必死にその安心感にしがみつき、自らが生み出している世界的な恐怖

から目を逸らしている。

これらの指導者は私たちとともに恐れを抱いている人々であり、核兵器廃絶への闘いは、彼らに対抗するものではない。核兵器の脅威について彼らを説得する唯一の方法は、共感の立場をとり、私たちが抱く疑念、疑問、世界大戦への恐怖を認識することである。私は絶対的な核廃絶論者ではない。心の底から核兵器を憎んではない。実際、核兵器があることによる安心感も少しは得ている。しかし、私の上にもぶら下がっているアルマゲドンの剣は、私にそうした安心感のない世界に向けた闘いを強いている。そのバランスと緊張を認識することが、核兵器廃絶の必要性について世界の権力者たちを説得する上での第一歩だと私は信じている。